

NHKドラマ番組部シニア・ディレクター

大森 洋平 さん

「花子とアン」「マッサン」「軍師官兵衛」…。好調のNHKドラマを裏方として支えるのが、時代考証専門のNHK職員である大森洋平さんです。最近、時代考証の内部資料を「考証要集」（文春文庫）として出版され、話題を呼んでいます。歴史とドラマの奥深いお話をうかがいました。

（聞き手・構成：芳賀 淳，中村 千之）



— まずは、時代考証の例をいくつかお願いします。

オーストラリアの発見は17世紀初めです。だから、戦国時代劇の「南蛮地球儀」にオーストラリア大陸が描かれていたら間違いです。

— でも、世界雄飛を夢見る織田信長が地球儀を回すかも。

そういうときは、オーストラリアが映る前にカメラを切り換えます（笑）。

— 世界史と関係してくるわけですね。

ある平安時代劇で、京に乱入した木曾義仲の軍勢が市場で暴れ、笹（ザル）に盛られたトウガラシをつかんでぶちまけました。

— 色が鮮やかで、画面で映えます。

しかし、これは痛恨の大NGです。トウガラシは中米原産で、コロンブスのアメリカ発見以前にはユーラシア大陸にはありません。室町・平安時代劇に使ってはいけません。「平清盛」では未然に防ぐことができました。

— 言葉も難しそうです。

「空気」という言葉は幕末明治以降の科学用語です。それ以前にはそもそも「air」という概念自体が日本にはありません。以前、某戦国大河で「部屋の空気を入れ換えなさい」という台詞を「お部屋に風を入れなさい」と直しました。

— 時代考証は戦国時代劇や江戸時代劇だけではありませんね。

日本陸海軍では帽子をかぶっているときはいわゆる挙手の礼をしますが、室内で帽子をかぶっていないときは、立礼（頭を下げる）をします。けっして帽子なしで挙手の礼をしてはいけません。

— ハリウッド映画では、米軍が帽子なしでも挙手の礼をしているのを見ますが。

そうですね。旧軍出身者はそれをみると等しく「異様な感じがする」そうです。

— 視聴者の声も大事です。

今年の朝ドラ「花子とアン」では、ちゃんと交換を通してから電話での会話が始まる描写をしてもらっていました。でも、かつて戦前を扱ったドラマで東海

地方から中国地方にいきなりダイヤルでつながることがありました。ずっと「そんなことないよ」と注意していたのに無視されて、オンエアしたら新聞の批評で「時代考証がなってない」(笑)。

— 東北大学の文学部では西洋史学科でした。

時代考証の仕事をするようになってから、つくづく西洋史をやっておいてよかったと思いました。日本の歴史の各時代を、等距離に見られますから。もし江戸時代とかを専攻していたとすると、他の時代を見る目が薄くなっていたかもしれない。

— 専攻は？

古代ローマ史でした。西洋の歴史って古代が1つの基本パターンになっていますので、あるパターンによってものを考える訓練はできたのでよかったと思いました。

— NHKにディレクターとして入られて、どんな番組を作りましたか。

地方にいたときは色々です。東京に戻って古典芸能をやっているうちに、だんだん時代考証癖が出てきて日本文化に関する美術番組とかをやりました。元々「ここにある物があるが、いかなる由来・過程により、この形でここに存在しているのか？」を考えるのが好きでした。その後京都に転勤したのもラッキーでした。お寺のお坊さんや老舗の漬物屋さんの若旦那と仲良くなって。やっぱりそういう人たちは本職ですから、物事の昔の様子を聞くのが楽しかった。

— 「考証要集」にも油紙での漬物の包み方のお話が出てきますね。

そういうのは絶対ネットじゃ出てきませんからね。

— 今の時代考証のお仕事になったのはいつですか。

1999年です。当時、放送用の様々な資料・記録を扱う部に「考証班」というセクションがあり、そこに

蔵書や時代考証の資料は随分あるんですけど、担当者に番組制作の経験がなかったので、現場スタッフの言うままに単なる辞書引き代行みたいになっていました。僕はそこを志願するまで制作現場でデスクまでやっていたから、ディレクターが本当に困って質問してるのか、自分で調べるのがめんどくさいだけなのかは大体分かるわけです。だから「大森さん、これが分からないんですけど」「ああ、なるほど。立ち上がって振り向いてごらん」「はい」「そこに国史大辞典があるから自分で引いて」と(笑)。

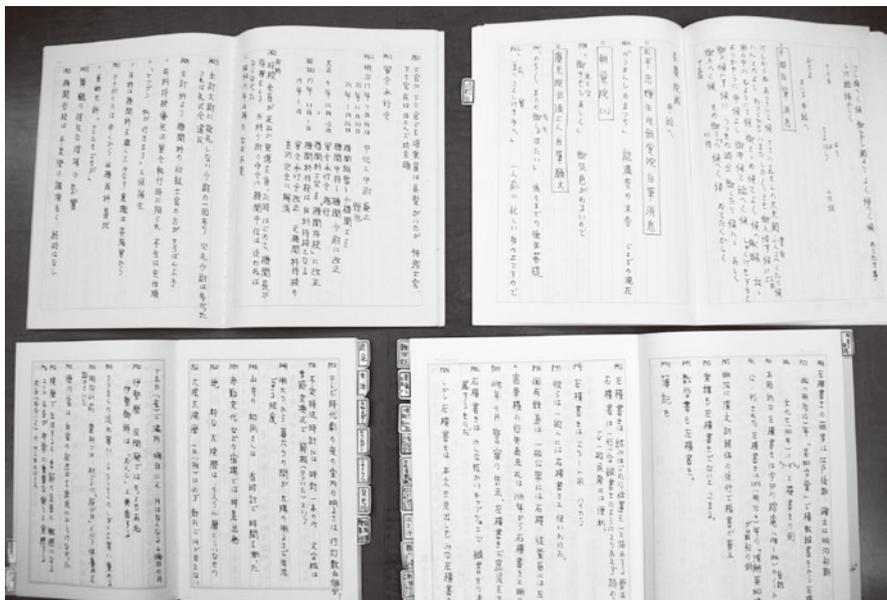
そのうちに、台本を読んで先に時代考証メモというのを作りスタッフに送るようになりました。「こういう言葉は江戸時代になからこういう言い方にしたらいいよ」とか、「この道具はこの時代にはまだないからこれで代行しなきゃいけない」とか、そういうのをA4の個条書きにしました。これが非常に便利だと評判になり、だんだんたまってきました。それから、スタジオにもロケにも行って、現場の疑問に即回答することも始めました。

— 衣装や小道具関係のチェックもありますね。

道具の使い方には、気を付けないといけない。民放時代劇だと殿様が脇息を置いて家来と話すけれども、本当は脇息はあくまでもプライベートの部屋で休息するときを使い、それも若い大名は使いません。まして家来と公的に話をしているときには置かない。あれはたぶん歌舞伎の広い舞台でただ座っているだけだと場が持たないので置いていた。そういう歌舞伎の色々なノウハウが、無声映画の頃の時代劇に入ってきて、それが今の時代劇まで受け継がれたというのが結構あるんですよ。道具はそれこそ1000年前から変わらないものもあるけれども、それを再現するだけじゃなくて、正しく使えるかどうかというのは、また別な問題になりますから。

— 放送までに色々な段階がありますか。

現場で気が付いてこれはないよ、とやることもあり



手書きの時代考証ノート



大森洋平さんの著書

考証要集
あなたの歴史力、ぐんとアップ!
NHK制作現場から生まれた、いまかつてない時代考証事典
9
文春文庫

『考証要集』
大森洋平 著／文春文庫

ますし、試写のときに見て、編集でやり直すこともあります。ただ、放送に出たらもうおしまいです。新人のときに上司から、「番組と屁は出てしまったら終わり」(笑)と言われたけど、そのとおりですね。

— 番組でお願いしている考証のための専門家の先生もいらっしゃいますね。

はい。先生方の守備範囲外に対応するのが自分の任務です。

— 大森さんはご自分のお仕事を「すきま産業」とおっしゃっていますが、そういう専門家同士のすき間を埋めるために何をなさっていますか。

一番いいのは読書ですね。それも古本をいろいろ集めてくる。あとはその当事者に聞く。ちゃんとした本は、やっぱりちゃんとしたことが書いてありますから、それを丹念に読んでいくのが一番いいし、それで蓄積したことを専門の先生にぶつくとちゃんとした答えがいただけます。先生方にも何か刺激になることが多いので、「これは面白い。思ってもみなかった」なんて褒めていただくこともありますので。

— どんな本を読まれるんですか。

聞き書きの類とか史伝とか、あと文章が明晰なものです。永井荷風の『断腸亭日乗』なんかも、戦前・戦中考証の資料として読むと非常に得るところが多い。

— 読んだ本は、気に掛かるところを一行一行、みんな手書きでメモしていらっしゃいます(写真参照)。

やっぱり手で書いた方が頭に入ります。いい万年筆を使って、好きな色のインクを使ってですね(笑)。これが考証のネタ帳です。

— 昔の映画も参考にされますか。

はい。実に役立ちますねえ。

— それは昔の映画の方が、考証がしっかりしていたということですか。

いや、歴史考証でいうと今よりも雑なところはあるんですけど、やっぱり昔の人は昔の建物や着物に慣れているから所作が綺麗だし、昔ながらの正しい日本語でしゃべりますから。例えば武士が帰ってきて刀を奥方に渡すとき、手が直接に刀に触れないようにたも

とで受ける。これを昔の女優さんは非常にうまくやるとか。

— まだそういう文化が残っていたのですね。

時代劇はそういうものを、日本舞踊とか茶道とかあるいは剣道とかでそれぞれ受け継いでいますから、そこから持ってきてまたひとつのシーンに組み立てることはできます。しかし、戦前ドラマの普通の生活や軍隊の動作は、相当失われてしまっているのが難しい。例えば自衛隊の所作は米軍の影響が強いので、旧日本軍とはまた違ったりします。そのまま取り入れるとおかしくなったりします。

— 公の文献にはないオーラルヒストリーを意識しているのでしょうか。

はい。古文書は同時代の人が紙に書いた記録ですから。今の弁護士さんが裁判所に出している書面を見て、それだけを基に（数百年後の人が）今の言語を想像したらかなり変なことになりますでしょう？

— そうですね。

古い言葉の用例については広く網を打たなきゃいけない。そういうときは、聞き書きとか、古典芸能に残っている言葉とか、実際の体験談とか、そのときその人は何と叫んだとか。「家康が『マタ勝ちタルワ』と叫んだ」。当時の文語文だけど、そういうところだけは口語文が残っていたりするわけで、丹念に拾うと役に立つことはありますね。

— これは怪しいぞと勘が働くときは？

やはり長年やっていると、嗅ぎ分けられるようになります。時代考証は法律と違っていて、疑わしきは死刑なんです（笑）。出さない方がいいんです。無理に出したら、絶対どこかおかしくなりますから。

— たとえば？

文書のリアリティとか。ディレクターは小道具で作

った手紙とか文書を画面に見せたがるんです。だけど、当時の文章は崩し字で書いてありますでしょう。するとパッと見たって、一般の視聴者にはわからない。それをたまたまテレビで学者さんや郷土史の研究家が見ていると、そんな書式はないし言葉がおかしいとか言ってくる。そういうときは、見て、アッと驚くなど、何かリアクションする演技だけでいいじゃないかと。リアルに見せようとする方向が違っちゃると、どんどん足をすくわれますからね。時代劇というのはあくまでもストーリーを楽しむものであって……。

— 「考証要集」の前書きで一龍斎貞水さんの「型破りなことをやろうと思うなら、まず型をよく知らなければならぬ」という言葉を引いていらっしゃいますね。

亡くなられた評論家で僕が非常に尊敬している瀬戸川猛資先生が、「やっぱり面白いものにはある型がある。それを踏襲すれば面白くなるんだけど、破ると面白くなくなる」ということを言っています。『ナパロンの要塞』という名作戦争映画が、実はギリシャ神話がパターンになっているんだというのを読んで、へ～と思ったんですけど。

だから、その型を重んじてやっていくと面白くなるんですよ。ところが、型を壊した後で何かを作るのは一苦勞です。壊すことに労力を使ってしまって何もその後に建設ができない。それこそどこかの国の悲惨な革命はあったけど、みたいなことになっちゃう。だから、ある時代の人たちは今とは違って、こういう枠組みでものを考えていたというのをおさえておけば、今見ても面白い話になるんです。戦国時代の人があまり自由、平等、博愛とか女性の権利とか言い出すと、それは今の理屈だろうということで、逆に面白くなくなる。だから、武家の奥方が百姓に話し掛けるときに、敬語なんか使わない。

— なるほど。

「そうしていただけますか」とは言わない。「そうしておくれでないか」とは言うかもしれない。あるいは

弁護士にオススメの 時代考証資料



『法窓夜話』
穂積陳重 著／岩波文庫



『徳川時代の文学に見えたる私法』
中田 薫 著／岩波文庫



戦前の法服(東京弁護士会所蔵)を
身にまとった大森洋平さん

「そうしておくれ」と言うでしょう。ただ、人間としての感情は今も昔も同じだから、その「そうしておくれ」に情を込めた言い方をすればいいわけで。

——フィクションのドラマとしては許される部分みたいなものがあります。その辺の判断はどうされるのですか。

時代考証はしっかりやります。さっきの「疑わしきは死刑」みたいに。ただ、それをどこまで採用するかは演出のさじ加減もありますね。黒澤明だったら、本当に女優さんにお齒黒にさせるかもしれないけど、毎週撮っているドラマでそこまで女優さんを拘束できるかというのは、また別な問題になりますから。

ただ、さっき言ったように、言葉の考証は厳しくて、当時なかった言葉は使うべきじゃないし、当時の言葉でも今のせりふにしたら分かりにくいところは、より耳になじむ大和言葉に直す。万事は相対的な問題になります。

——絶対的な基準はない。

はい。大河ドラマなんて、NHKが作るから絶対的な基準に違いないと思っちゃうんですけど、決してそういうことはありません。

——最後に、弁護士にオススメの時代考証資料がありましたら。

穂積陳重「法窓夜話」(岩波文庫)と中田薫「徳川時代の文学に見えたる私法」(岩波文庫)はいかがですか。

——「徳川時代……」は知りませんでした。

江戸時代の婚姻、手附、離婚、相続などについて、近松や西鶴の作品から題材を引いて説明しています。とても面白いです。

——今日は、東京弁護士会所蔵の戦前の法服も着ていただきました(写真参照)。

祖父が戦前、検事だったんで感無量です！ 貴重なものをありがとうございます。戦前の法曹界を描く番組を作るときには、ぜひともご協力をお願いします！

プロフィール おおもり・ようへい

昭和34年 東京都生まれ。東北大学文学部西洋史学科卒業。NHK入局後、古典芸能部、教養番組部等を経て、平成11年よりドラマ・ドキュメンタリーの時代考証業務を担当。現在、NHKドラマ番組部 シニア・ディレクター。